

Small Story in Kamijima

かみじま発 スモールストーリー



魚島 (うおしま)

人口 177人 世帯数 106

集える しあわせ

お話をきかせてくれた人

魚島舞踊部師匠
松原 妙子さん

大阪府岸和田生まれ。「大恋愛」の末、魚島に嫁ぐことになる。島のお年寄りに楽しんでもらおうと、幼少期から習っていた舞踊を披露したことをきっかけに、島の女性たちに舞踊を指導することになる。島歴40年。好きな食べ物はバッテラ。

Small Story in Kamijima vol.5

敬老会に向け、踊りの指導をする妙子さん。
夜8時、1日の仕事を終えた女性たちが島の集会所に集まり、稽古が始まる。

瀬戸内海の真ん中にぽっかり浮かぶ島、魚島。その名の通り、古くから漁業で栄えてきた漁師の島だ。江戸時代より、魚島近海で獲れる鯛は「魚島鯛」として有名で、将軍家への献上品にもなっていた。

この魚島に40年前大阪から嫁ぎ、強く明るく生きてきた女性がいる。幼少期に習った日本舞踊の経験を活かし、島の人たち楽しんでもらおうと、魚島舞踊部の活動を行なっている。小さな身体からは想像もできないほど、ダイナミックで軽やかな舞から、島の人たちからは「魚島の踊り子」と呼ばれている。

舞踊部の稽古終わりの“女子会”にお邪魔し、和気あいあいとした雰囲気の中で、舞踊部の皆さんと一緒に、島で生きてきた女性の人生観を伺った。



チャーミングな笑顔が魅力の妙子さん。

大阪 岸和田から島へ

—妙子さんが魚島に来られたときの島の様子を教えてください。

私が魚島に嫁いで来た時は、まだ人口が700～800人くらいおったと思います。今みたいに埋め立てしてなくて、すぐそこまで海やったんです。来た当初は、慣れん土地で寂しいのと、今までしたことがないことばかりで戸惑いもありました。

電気は通ってたけど、電話はなくてね。役場に行きに行くんです。電話がかかってくると、「〇〇さん、電話です

よ～」って放送で呼び出しされるんですよ。

水道は、週に2回しか使えませんでした。みんな、家や倉庫の屋根にタンクを置いていて、水が出た時に、飲み水や生活用水を溜めてましたね。お風呂も薪で焚いていたし、汲み取りも自分たちでやってたんですよ。

魚島は、他の島に比べると、下水が100%になったのは早かったんやけど（平成4年に全戸に下水道が普及）、それまでは本当に大変でした。水洗になったときは、本当に嬉しゅうてね。

汲み取りせにやあかんと思うと、本当に嫌で嫌で、夢に見るほどやったんです。村で共同の汲み取り用バケツがあって、そこに半分ぐらい（汚物を）入れて、海の方まで運ぶの。階段とかね、大変なんよ。私小さいから、持つのにほんまに苦労しました。その後、水洗になってからでもね、「あれせなあかん、あれせなあかん」ってしばらく夢に見ましたよ。（それはお嫁さんの仕事だったんですよね？）やっぱり「男にそんなことさせて～」って言われちゃうからね。女の仕事でしたね。

みんながしてることだから 苦にはちっともならんかった

そんなんでもね、水がでたら運ばなあかんわ、風呂も焚かなあかんわ、汲み取りもせなあかんわ。とにかく、今まで全然したことがないことばかりで、来た当時は「え～っ」って思うことがいっぱいありました。せやけど、若さやね。やっぱりみんながしてることだから、ちっとも苦にはならんかったね。



(上)昭和41年頃 結婚式風景
(中)昭和33年頃 働く女性たち
(下)昭和37年 井戸水を運ぶ主婦たち
出典：『島の肖像』平成16年 魚島村役場発行

魚島ニ昭和史

- S25(1950) 人口1549人を記録。その後、人口はしだいに減少していく。
- S32(1957) 簡易水道が全村50%に普及
しかし、取水率は週2～3回数時間程度であった。
- S43(1968) 終日送電開始
それ以前は自家発電機で、日没～午後11時までの限定使用だった。
- S52(1977) 全給水開始
- S57(1982) 一般電話開通
- H4(1992) 下水道完成。下水道普及率100%で日本一になる
※平成24年現在、全国普及率は75.8%



お年寄りに楽しんで もらうために踊るようになった

—魚島舞踊部の活動を始めたきっかけを教えてください。

昭和47、48年頃の敬老会で私が踊ったのがきっかけです。その時は、私が大阪で踊りを習っていたという話から、「たえちゃん、あんた踊るんやったらやってや」ということになって、一人で踊ることになりました。

—踊りはどこで習われていたんですか？

子どもの頃、大阪にいたときに習っ

学校の先生も参加してくれて、若いメンバーで賑やかにやったりします。敬老会、お祭り、文化祭。この3つが1年間の大きなイベントで、各イベントの前に、こんな感じで集まって練習しています。

—魚島舞踊部の踊りは、どのような踊りですか？

私が元々習っていたのは、日本舞踊でした。お師匠さんが三味線を弾いて踊るような、ちょっと堅い雰囲気のもので。けれども、今しているのは、もっと我流で、流行歌も取り入れて、

ていました。教えてくれたのは、京都のお師匠さん。舞妓さんにも教えるような先生でした。正直、踊りは好きじゃなかったんですけど、親の勧めで何でも習っておいた方がいいってことで、嫌々やってきましたね。お師匠さんも厳しい人やったから、怒られながらでね。今になったら、習ろうておいてよかったなと思うけどね。まさか、魚島で踊りが役に立つと思わなかったし。

それから徐々に、踊りたいという人が出てきて、教えるようになりました。一人増え、二人増え・・・入れ替わりもあって、今は、私含めて6名。魚島小

親しみのある曲で踊っています。おじいちゃんやおばあちゃんが手拍子して見れるようにと思っています。

—踊りのインスピレーションはどこから来るんですか？

町を歩いていると、パツと閃いたり、(衣装の参考のために)キラキラしたものに目が行ったりしますね。

振り付けは、曲を聞いて自己流でつけています。一度振りをつけても、寝て起きたら、ここの手はこうした方がいい



今年の敬老会のトリには、「♪ニッポン道中いただきます」を選曲。楽しい曲に会場は大盛り上がり。

いんじゃないかと、思い直すこともあって。せやから、直前になって振りを変えることもありますね。でも、みんな飲み込みが早くて、すぐに覚えてくれて。踊りの先生って言うても、そんな感じで私はええ加減やから、あんまり偉そうに言えんのですよ(笑)。(周りのメンバーから、「そこがええところよ！」の声)

そんな私のやり方に、みんなもう慣れてくれて、いい加減な指導でも、いいことをすぐに飲み込んでくれますよ。

魚島むかしむかし

吉田磯 (よしだいそ)



今から200年ものむかし、九州、島津藩の御用船吉田丸が、将軍家への上納米を満載して江戸へ向う途中、魚島の沖合で大しけにあい、沈んでしまいました。このとき、吉田丸とともに海底に沈んだ上納米は、くさってしまったのです。このくさった米を見つけて、鯛の大群が住みつくようになり、魚島の吉田磯は鯛の好漁場として天下にその名を知られるようになりました。

鯛網の全盛時代には、一網で数万尾もの鯛が獲れ、海面は桜色一色になったそうです。漁師さんたちが、浮いた鯛網の上で酒盛りをしたという話も伝わっています。漁の様子を今治方面から見物客を乗せた船が来ていたということです。

「先生が一番元気。それまでは、足が痛いとか言っているけど、舞台上に立ったらほんとは軽やかに宙を舞うんです。」(舞踊部メンバー談)



「たのしく踊る」がいちばん！

メンバーが増えてくれて、楽しいんです。欲がでてきたというか、次はこの曲がいいんじゃないかとか、あの子にはこの衣装を着せようとか、毎年自分なりのプランはあります。

子どもの頃は、嫌々していた踊りが、こうして魚島で役に立つとは思っていませんでした。私のお師匠さんは、厳しい人で、振りもきっちり決まっていますが、私はええ加減。試行錯誤して、振りもコロコロ変えてしまうので、みんな

を困らせていると思うのですが、頑張ってくれています。

とにかく派手に、楽しく、みんなが喜んでくれたらいいと思っています。間違えたら、くるっと回ってニコッとすればいいんです(笑)。

見てくれている人が、目の前で素直に喜んでくれるのが嬉しいですね。「今年もよかったよ〜」って言うのが嬉しいんです。

—これからの活動の目標は？

私がいつまで教えられるか・・・できたら、そろそろ敬老会は客席で見ようにしたいです(笑)。

(メンバーから「最高記録作ったらええやん！米寿対象者が踊りますとか言って。100歳になったら金色のちゃんちゃんこ着て、踊ろうや。そのころになったら、手を動かすだけでも拍手ももらえるで。」の声(一同、爆笑))。

みんなと寄るのが 楽しいんよ

—島で幸せに暮らすということ？

小さな島で心地よく暮らすコツは、人の言うことはあまり気にしないこと。昔の人は堅い所もあったし、魚島の風習もいろいろありました。私が来た当時は、あれしたらあかん、これしたらあかんっていうのが色々あったけど、今はだんだんそういうことも少なくなってきたんやないかな。



稽古終わりの“女子会”。みんなで輪になって、おしゃべりする楽しい時間。

狭い所ならではの「ええところ」があります。協力的なところもあるし、身内以上にかばってくれることもある。でも一方で、難しいこともある。それは、どこだって一緒やと思うんやけどね。

やけど、私はこんな楽道家だから、あんま人の言うことは気にせずやっています。人に言われたら言い返す。一人でジメジメ考えない。「言うてるからほっとけ」じゃなくて、「ちゃんと話す」。そういう風になりました。何と言われようと、自分は自分なりに頑張って

やったら、ええんじゃないかなと思うんです。

結局は、とにかく明るく、朗らかに。みんなが仲良うに、楽しく暮らしていければいいなと思うんです。

年は違うけど、こうやって若い人と仲良うにする雰囲気楽しいし、年配の人と話をすることも楽しい。みんなで輪になってすることが楽しいんよ。私は、一人っ子だったんで、この子らが、娘のような、妹のような感じで、一緒に

わいわいしているのが楽しいんです。

島の暮らしは、作業とかしんどいこともあるけれども、やっぱりみんなと「寄る」(集まる)のが一番楽しいですね。みんなに会って、馬鹿話して帰るのが楽しい。それで、その楽しい話を家に帰って、お父さんにまた話すんよ。お父さんに話して楽しいときもあんねん、でも、時によっちゃ、それで喧嘩になることもあるねんけど(笑)。



あかるく
たのしく
ほがらかに

魚島舞踊部

魚島舞踊部 秋の舞



魚島秋祭り宵宮で、舞踊を披露する妙子さん。亀居八幡神社芝居小屋にて。



♪ 夢うぐいす (Atsuko & Kazue)



Lovely



魚島のはっぴ



♪ YOSAKOI 祭り唄 (Ai, Kyoko & Shizuka)

The actress

The actress 2



「人が集まるのが幸せ」と
 言える「幸せ」

今回は、魚島舞踊部のスモールストーリーをお届けしました。舞踊部のみなさんは、ほんとに元気。そしてキュートです。彼女たちが舞台上になると、魚島のお父さん方の熱狂ぶりが見事です。「おひねり」にビールやお菓子やら、色々持ってきてくれたりするんです。魚島の「華」なんです。

妙子さんの魚島昔話から始まった今回のインタビュというか、「女子会」。実は、汲み取りのくんだりもつと盛り上がったのですが(笑)、紙面のスペースの都合上、縮めさせていただきました。それにしても、自分たちで汲み取りしていたなんて、尊敬です：。しかも、自分の家だけではなくて、若いお嫁さんは、親戚のお年寄りの家もしていたそうです。魚島村誌を見てみると、下肥は、かつては畑に持っていく、化学肥料が普及するようになると、海に捨てるようになったのだそうです。昭和48年に、下肥の海洋投棄が法律で禁止されるようになり、それからは処理施設で処理するようになったようです。

当時、問題もいろいろあったのでしようけれど、そうやって人の暮らしが自然の一部に組み込まれていたシステムは、本当は優秀だったのではないかなと思います(かといって、自分が汲み取りできるかという点、ゴメンナサイなのですが)。昔は畑の肥料にするために、町から、生活ゴミを買っていたという話も聞いたことがあります。こうして、ゴミがお金になる時代から、「ゴミを捨てるのにお金がかかる時代になりました。」

何もかもが「昔はよかった」とは思いません。ただ、経済成長の裏で置いてきてしまったものには興味があります。それは、自然の中で生かされることであったり、村という共同体のなかで生きる幸せのようなものです。

「小さな島で暮らす」ということは、いいことも悪いこともある。けれども、幸せなのは、みんなが集えること」という妙子さんのことは、本当にそうなんです。こちらに暮らすようになって、その大切さを実感しています。さらに妙子さんから見習うべきところは、その集って話した話を、家庭でまた共有するという点。ここが夫婦円満の秘訣なのかもしれません。「村」の中に「家」があって、村と家がつながって「暮らし」しているということ。魚島の魅力は、そこにあります。



click
 本誌の
 コンセプト

『スモールストーリー』が読める場所

【紙で読む】弓削総合支所、弓削港、町民プラザ、せとうち交流館、弓削商船図書館・寮、弓削高校図書室、弓削中学校、しまでカフェ、やよみ亭、立石港、岩城港、岩城中学校、よし正
 【ネットで読む】上島町島おこし協力隊のブログ <http://setouchi-k.town.kamijima.ehime.jp/blog/sima/>

About ME



文と写真と編集
 ふじまき みつか (まっきー)

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学卒業。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→上島町生名

都内マーケティング会社に勤務のち、2011年10月より、愛媛県越智郡上島町(人口約7400人)の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

最近の出来事:初めて干し柿を作っています。ベランダに干しているのですが、鳥に食べられずにちゃんとできるかドキドキ。だいぶ寒くなってきたから、次は、秋に収穫したサツマイモで干し芋を作ってみようと思います。

click
 いいね!してください
facebook

click
 協力隊の日々をチェック
blog



かみじまのことば

いんでこーわい

【意味】 帰ってまた来る

【用例】

かあちゃんが呼びよるけん、いんでこーわい。
 (妻が呼んでいるので、ちょっと帰ってまた来ます。)



How do you think?
 ご感想お聞かせください。

メール: fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp